

# 『ニーベルンゲンの歌』における

## 伝説の変容

野内 清香

### 序

紀元 1200 年頃に成立したとされる、中高ドイツ語による叙事詩『ニーベルンゲンの歌』Das Nibelungenlied（作者不詳）は、5, 6 世紀の古代ゲルマン伝説を手本としているために、特に「英雄叙事詩」と呼ばれている。しかし、ニーベルンゲン詩人は単に伝説をそのまま語り直そうとはしなかった。むしろ彼は己の構想に見合った形で素材を取捨選択し、あるいはそれを変形して、彼独自の作品である『ニーベルンゲンの歌』を創出したのである。故に、その詩人の創作意図は、彼がニーベルンゲン伝説の姿をその叙事詩の中でいかに変化させたかという点を探ることで明らかになる。

そこで、この論文ではまずアンドレアス・ホイスラーの発展段階説に基づいて、伝説の発生から『ニーベルンゲンの歌』へ至る道程を考察した後に、同じくニーベルンゲン伝説を題材とする北欧の『ヴォルスンガ・サガ』における素材の扱い、特に主要人物の描き方を比較することによって、伝説がいかなる変容を遂げたのかということを検討したい。

### 1. 伝説から『ニーベルンゲンの歌』へ

39 の歌章 Aventure, 2379 の詩節 Strophe（写本 B）からなる『ニーベルンゲンの歌』は、内容上大きく二つの部に分けることができるが、ホイスラーの発展段階説<sup>1)</sup>によれば、第 1 部（第 1-19 歌章, 1-1142 詩節）はブリュンヒルト伝説に、第 2 部（第 20-39 歌章, 1143-2379 詩節）はブルグント伝説を根底にしている。

#### 1) ブリュンヒルト伝説

第 1 部の基となるブリュンヒルト伝説は、5, 6 世紀のライン・フランケンで初めて生まれたと推定される。この伝説が生まれた背景にどのような歴史的事実があったのかということにははっきりしないものの、プロコープの

『ゴート戦争』の中に、次のようなゴート族に関する歴史的事実が読み取れるという。<sup>2)</sup>

540年頃のゴート族のある気高い貴婦人が水浴中に王妃を侮辱した。王妃は泣きながら夫のもとに行き、復讐を要求する。国王はそのゴート女性の夫を裏切り者として中傷し、それを殺害によって片づけた。

この事件の当事者は名前を伏せられているが、王妃＝ブリュンヒルト、国王＝グンテル、貴婦人＝クリエムヒルト、その夫＝ジーフリトに相当するものと見なすことができる。

また、「ブリュンヒルト」という名に注目するならば、歴史上の人物として6世紀の西ゴート族の女王ブリュンヒルデ(ブルニヒルト)が確認される。<sup>3)</sup>ブリュンヒルデは540年頃に生まれ、フランク王国の東分国アウストラシアのジギベルト王と結婚する。ジギベルト王の異母兄弟ヒルペリヒは西分国ノイストリアの王であり、ブリュンヒルデの姉妹と結婚した。やがてジギベルトとヒルペリヒの間に戦いが起こり、ジギベルトは575年に謀殺され、ブリュンヒルデは捕虜となるが、ヒルペリヒの息子が彼女の命を救い妻とした。まもなくブリュンヒルデはフランク族の中で権力を持つようになり、三十年以上に渡って影響力をふるい、その間、国王に仕える貴族を十人以上も殺害した。だが613年、フランク族貴族の一団が彼女を捕え、三日間に渡る拷問の末、野生馬に引かせて八つ裂きにした上、薪を積み重ねて焼いた。

こちらは物語の筋という点では前述のゴート族の事件のように明確な類似は見られないが、この女王の猛々しく苛烈な性格が、男勝りの女傑ブリュンヒルトの激しい性格に影響しているように思われる。

## 2) ブルグント伝説

ブリュンヒルト伝説に比べ、ブルグント伝説の方はその土台となった歴史的事実がはっきりしている。つまりブルグント族がフン族によって滅ぼされたこと、及びフン族の王アッティラの死という歴史的事実に由来しているのである。

歴史上のブルグント族は、5世紀前半に当時ローマ領であったヴォルムス近郊のライン河流域に定着する。436年、ローマの支配者アエティウスに対して反乱を起こすが、ローマ帝国側に立ったフン族の派遣隊によって反乱は鎮圧され、437年までにほとんど全滅させられてしまった。この時のブルグントの王の名がグンディハリ(ドイツ語のグンテル、北欧語のグンナル)である。なおこの時、フン族の王アッティラ(ドイツ語のエッツェル、北欧語のアトリ)は別の場所にいたため、反乱鎮圧には加わっていなかった。<sup>4)</sup>

それから10年以上が過ぎた453年、アッティラはゲルマン人の側室ヒルディコを迎えるが、結婚式の夜に大量の血を吐き急死してしまった。この事件は先のブルグント族の滅亡と結びつき、「ヒルディコはフン族の王にブルグント族の復讐をした」のだと解釈されたのである。

この解釈に基づいて生じた初期の伝説の形は、『エッタ』中の「アトリの歌」<sup>5)</sup>(870年頃、ノルウェーで成立)に認められる。その粗筋は以下のようなものである。

フン族の王アトリは財宝を目当てにグンナルらを招く。先にアトリに嫁いでいたグンナルの妹グドルーンは狼の毛を絡ませた腕輪を贈って警告するが、結局グンナルとその弟ヘグニはアトリの国に向かい、兵士たちに捕えられる。彼らがグンナルに宝を積んで命をあがなう気はないかと尋ねると、グンナルはヘグニの心臓を持ってこいと言う。それが実行されると、グンナルはこれで宝の在処を知っているのは自分だけであり、アトリは永遠にその宝を拝めないだろうと言う。アトリはグンナルを生きたまま蛇の群がる牢に投じて殺す。グドルーンは兄たちの死を嘆き、アトリに復讐することを決意する。彼女はまず自分とアトリの間に生まれた二人の息子を殺してその心臓をアトリに食わせ、次いでアトリを殺し、館に火をつけて中にいる人間を皆殺しにする。

ここでは「フン族によるブルグント族殺害」に対する「ブルグント女性によるフン族への復讐」という因果関係がはっきりと示される。アトリは自らブルグント族に働きかけており、彼らの死に対する責任はアッティラよりも重くなっている。ヒルディコは殺されたブルグントの王族の妹グドルーンに変わり、私闘によってアトリを討つにふさわしい人物となる。

そして、ここでもまた新しい解釈が入り込んできている。歴史上フン族がブルグント族と戦ったのは、ローマの将軍の援軍としてであったが、アトリは彼らの「財宝を狙って」自らの意志で動いている。この財宝が、もとはシグルズのものであったニーベルンゲン財宝と同一視され、ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説とが結びつくことになる。

これがさらに『ニーベルンゲンの歌』では次のように変わっている。

クリエムヒルトは前夫ジーフリトを殺してニーベルンゲン財宝を取り上げたハゲネを恨み、彼に復讐するために、エッツェルに本心を隠したままブルグント族をフン族の国に招待させる。クリエムヒルトがエッツェルの弟にブルグントの兵士たちを襲撃させ、それを聞いたハゲネがエッツェルとクリエ

ムヒルトの間に生まれた王子を殺したことによって、激しい戦いが起こる。フン族側もブルグント族もほとんどが死に絶え、最後まで残っていたハゲネとグンテルもついにディエトリーヒに捕えられる。クリエムヒルトはハゲネに、財宝を返せば命を助けてやると言うが、ハゲネは自分の主人たちが一人でも生きている間は宝の在処は明かせないと言う。そこでクリエムヒルトがただちにグンテルの首を落とさせてそれをハゲネに突きつけると、彼は、宝の在処を知るものが自分一人になった今、彼女にはその宝は永遠に隠されたことになったのだと告げる。クリエムヒルトはハゲネからジーフリトがかつて帯びていた剣を取り上げ、それでハゲネの首を打ち落とす。しかしこの行ないのために、彼女自身もまたヒルデブラントに切り捨てられる。

新たに登場するディエトリーヒは、歴史上の東ゴートのテオドリック大王をモデルとした人物で、アッティラの死後生まれたのだが、若い頃ビザンツ皇帝の宮廷で人質生活を送ったことが、伝説の中では叔父から祖国を追放された後にアッティラの宮廷に身を寄せたと解釈されて、そこからニーベルンゲン伝説との接点を持つようになった。<sup>6)</sup> この別な伝説群から取り込まれたディエトリーヒや、彼の武芸の指南役であるヒルデブラントが、事態を收拾するのに大きな役割を担っているのは興味深い。

しかし、何よりも重要なのは、復讐の因果関係が逆転したことである。ここではクリエムヒルトの復讐の対象は、前夫ジーフリトを暗殺しニーベルンゲン財宝を奪ったハゲネやグンテルであり、「フン族によるブルグント族殺害」は復讐の結果であって動機ではなくなっているからである。そしてこの復讐の対象・動機の変化によって、フン王エツェルの役柄は物語中での重要性を減じてしまう。フン族の戦士たちのほとんどがブルグント族との戦いの中で死に絶えてしまうという点で、「フン族の滅亡」という項目は満たしているのだが、肝心のエツェル自身はクリエムヒルトとともに後方で指示を出していただけなので生き残る。そもそもブルグント伝説の出発点はアッティラの死という歴史的事実であったにもかかわらず、もはや「フン王の死」は必要不可欠な要素ではなくなっているのである。

### 3) 二つの伝説の融合

ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説は、『エッダ』の段階でもニーベルンゲン財宝を仲立ちとして結びついてはいたが、そこではまだ筋が進行する時間軸の上で緩く連続しているだけだった。しかし『ニーベルンゲンの歌』の詩人は、クリエムヒルトの復讐を主軸として、ブリュンヒルト伝説に基づ

く前半部分の「ジーフリトの暗殺」をその原因に、ブルグント伝説に基づく後半部分の「ブルグント族の滅亡」「フン族の滅亡」をその結果にしている。これによって、二つの伝説はただ順番に起こった出来事というだけでなく、緊密な因果関係をもって結びつくことになる。

また、この叙事詩は、冒頭に「古い物語には多くの驚くべきことが語られている (Uns ist in alten mæren wonders vil geseit) (1, 1)」とあるように、一応はより古い時代の物語を語るという体裁をとるものの、実際には舞台は同時代の宮廷的な世界に移され、そこに登場する人物も、民族大移動期の異教的な英雄たちから、キリスト教の精神を遵守する騎士や貴婦人に変化している。クリエムヒルトの復讐の対象の変化も、この時代背景を抜きには語れないものである。

伝説は語り継がれていくうちに、その時代時代の人々の考え方に影響を受けたり、他の伝説群との接触によって新しい登場人物や筋を取り入れたりして変化してきた。『ニーベルンゲンの歌』の詩人もまた、そうした伝承を素材としながら、独自の解釈により物語の緊密な構成を整え、また舞台を騎士社会に置き換え、宮廷的な描写を加えることによって、古い物語を騎士叙事詩として新しく作り上げたのである。

## 2. 『ヴォルスンガ・サガ』との比較

12世紀末から13世紀にかけて、アイスランドではそれまで口承で伝えられていたヴァイキングの活動やアイスランドにおけるキリスト教布教の歴史、またゲルマンの神話や英雄伝説などが散文作品にまとめられた。これがサガである。

『ヴォルスンガ・サガ』<sup>7)</sup>は、ゲルマン民族大移動期(4世紀)から北歐人のヴァイキング時代(8世紀半ば-13世紀半ば)までの史的伝承、また民間に行なわれていた口頭伝承に素材を求めた「古代のサガ」(「伝説的サガ」)に分類される。<sup>8)</sup>その内容は早くから北歐に歌の形で伝えられ、『エッダ』中に断片で残されたニーベルンゲン伝説の散文化である。おそらくアイスランドで1260年頃に成立したとされるが、ノルウェー説もある。成立年代は『ニーベルンゲンの歌』よりも少し後になるが、舞台を宮廷社会に置き換えるような「翻案」を行わず、一種昔話のように語られており、伝説の古い形に近い。

ただし、大陸で生まれた伝説は、スカンジナビア半島やアイスランドのように遠く離れた土地で長い年月語られているうちに、細部では独自の变容も見せている。例えば、ジーフリトにあたる人物は、ここではノルウェー王家

に組み入れられている。また、ブルグント族がライン河地方からフン族の国（ハンガリー）へ向かう際には、竜骨をもった船を猛烈に漕いでいくという描写がなされている。語り手にも聞き手にも遠い異国の地理的な知識が欠落する中でも、物語の筋は人々の関心を引くものとして残り、ヴァイキングの活動と重ね合わされて、その社会の人々にとって現実的に感じられる語りの中で生き続けているということだろう。

この古い形の保持と独自の変容によって、『ヴォルスンガ・サガ』は、『ニーベルンゲンの歌』とはまた異なるニーベルンゲン伝説という素材の発展の可能性を示していると言える。このサガとの比較によって、叙事詩中で伝説のモチーフがどのような変化を遂げたのか、そしてニーベルンゲン詩人はいかなる創作的意図の下に作品を形成していったのかということが明らかになるだろう。

登場人物は次のように対応している。

『ニーベルンゲンの歌』	『ヴォルスンガ・サガ』
ジーフリト Sífrit	- シグルズ Sigrud
クリエムヒルト Kriemhilt	- グズルーン Gudrun
グンテル Gunther	- グンナル Gunnar
ブリュンヒルト Prünhilt	- ブリュンヒルド Brynhild
ゲールノート Gêrnôt	- グットルム Gutthorm
ギーゼルヘル Gîselher	(登場せず)
ウオテ Uote	- グリームヒルド Grimhild
ハゲネ Hagene	- ホグニ Högni
エツェル Etzel	- アトリ Atli

基本的な設定の上でいくつかの違いがあり、ハゲネにあたる人物ホグニは臣下ではなく、グンナルやグズルーン、グットルムとは血のつながった兄弟である。ブリュンヒルドはブズリ王の娘であるが、アトリもまたこの王の息子であり、二人は兄妹にあたる。

### 1) 語られる内容と世代

『ヴォルスンガ・サガ』がシグルズの先祖の冒険譚から始まり、オーディンやロキといったアース神話の神々が登場するニーベルンゲン財宝の由来を語っているのに対して、『ニーベルンゲンの歌』は最初からジーフリトの代

の話である。しかも、ジーフリトが不死身の肉体とニーベルンゲン財宝を手に入れるに至った経緯は、前史として物語の中に挿入されるという形を採る。ジーフリトが初めてウォルムスにやってきた時に、あの者は何者かというグンテルの問いに答えて、博識のハゲネがジーフリトの武勇伝を語る。これによって、この物語の筋は「ジーフリトがクリエムヒルトの手を求めてブルゴント族の国にやってくる」というところから動き始めることになる(第1,2歌章は「鷹の夢」が物語の先行きを暗示する他は、登場人物の紹介や背景の説明に留まっており、実際に筋が進行し始めるのはこの第3歌章からである)。ジーフリトはシグルズのように様々な冒険の中でその地に流れ着いたのではなく、過去の冒険で得た名声と財産をもった勇士として、クリエムヒルトの愛を得ることを目的としてやってくる。つまり、この叙事詩の中で語られる歴史はジーフリトとクリエムヒルトの愛に始まり、この二人の関係が主軸となるという物語の構成が確かなものになるのである。

物語の結末も、『ヴォルスンガ・サガ』では、グズルーンがフン族を滅ぼした後、ヨーナク王の妻となり息子たちを産み、ジーフリトとの間に生まれた娘スヴァンヒルトが殺されると息子たちにその復讐をするようにけしかけ、彼らもまた命を落とす、というところまで語られているのだが、『ニーベルンゲンの歌』ではフン族の王の宮廷での戦いの後、クリエムヒルトが殺されて終る。幅の広い物語の中からある一部分を取り出し、他は捨て去ったことによって、『ニーベルンゲンの歌』はジーフリトの暗殺とその復讐という明確な軸を持ち緊密に構成された物語となっている。

## 2) 登場人物 (1) ——ジーフリトとクリエムヒルト

シグルズの出自は神話的である。彼の先祖のシギはゲルマン神話の主神オーディンの子と呼ばれた人物であり、そのためオーディンはしばしば物語に介入してくる。シギの息子レリルは長い間子供に恵まれなかったが、子供を授けてほしいとの祈りを聞いたフリッグ(オーディンの妻で結婚と出産の守護者)のとりなしでオーディンから送られたリングを食べたところ妃は身籠もった。この子が一族の名の由来となったヴォルスングであり、彼は母の胎内で6年間過ごした後に、帝王切開で取り出された。彼が巨人の娘との間にもうけた子供たちの一人が、シグルズの父となるシグムンドである。

それに対してジーフリトは、気高いニーデルラント王子であり、人間世界に生まれ生きる人物である。身分相応の教育と生まれもつての気質の賜物で、彼はすばらしい才能を身につけるが、さらにその超人的な強さについては、竜退治の際に得た竜の血の加護(それを浴びたことで肌が何物にも傷つ

けられない甲羅と化した) という、外部から付与されたものとして説明づけられる。

一方グズルーンとクリエムヒルトは、昔話のような世界と宮廷的な世界の違いはあっても、どちらもその世界で権勢を持つ一族の姫君として生まれた、たいへん美しく高貴な女性である。そしてまた、激しい気性を内に秘めている点も共通している。決定的な違いは、彼女たちの復讐の理由と対象の違いである。グズルーンは素材の伝説に従って、グンナルやホグニら身内のものがアトリに殺されたために、その報復としてアトリの一族を殺す。しかしクリエムヒルトはジーフリトの死を引き摺り、彼を殺したハゲネに復讐するために大勢のブルゴント族の勇士やファン族を巻き込んで両者を死に追いやる。この復讐の意味の劇的な変化が『ニーベルンゲンの歌』の決定的な特色になっているといえる。

#### 宮廷的物語の中の理想的な結婚

クリエムヒルトの心理に説得力を与えるための材料は、同時代に成立したアルトゥース・ロマーンに求められるだろう。

アルトゥース・ロマーンはいわゆるアーサー王伝説を素材とする物語だが、ドイツの詩人たちのそれは、直接素材となる伝承に取材して書かれたものではなく、フランスの既存の作品を翻案したものである。例えばハルトマン・フォン・アウエの『エーレック』、『イーヴェイン』はそれぞれフランスのクレチアン・ド・トロワの『エレックとエニード』、『イヴァンまたは獅子をつれた騎士』の翻案である。<sup>9)</sup>

『エレックとエニード』の序文で、クレチアンは「語りを生業としている者たち」がむちゃくちゃにしてしまった物語に、自分は「美しい構想」を与えるのだとしている。14世紀末に記録された『ハーゲストの赤本』の中に、クレチアンの四つのアーサー王もののうち三つと大筋において対応する三つのウェールズの古譚が認められることから、彼が文字によって記録される以前に口承されていたこれらの物語を吟遊詩人の語りによって知り、それに独自の解釈による「美しい構想」を与えて作品としてまとめ上げたのである。<sup>10)</sup>

『エレックとエニード』の主題は、新妻エニードへの愛に溺れて騎士の道を忘却してしまったエレックが、それを悲しむ妻とともに冒険の旅に出て、苦難をともにすることでより高い次元の愛に到達するというものである。また『イヴァンまたは獅子を連れた騎士』では、ある冒険で女城主と結ばれたイヴァンが、仲間の騎士に誘われて再び冒険の旅に出るが、妻と約束した期



日までに戻らなかったため彼女の怒りをかい、二度と彼女のもとに戻らぬように言い渡される。イヴァンはこれを聞いて一度は発狂するが、意識を取り戻してからは様々な試練を乗り越えて人間的に成長し、最後には再び妻と結ばれる。ここでも描かれるのは試練の末に深化する夫婦の愛である。クレチアンが念頭に置いていた「美しい構想」とは、こうした苦難を経て自らの価値を高め、より高い次元の愛に到達するという主題のことなのである。こうした作品を手本にしたハルトマンの作品にも、この精神は受け継がれていると言っている。

クリエムヒルトとジーフリトはこうした理想の夫婦として描かれ、その下書きとして、第一歌章と第二歌章では、それぞれが宮廷的な理想の人物として紹介されている。<sup>11)</sup>

まず初めにクリエムヒルトについては次のような描写が行なわれる。

Ez wuohs in Búrgónden ein vil édel magedîn,  
daz in allen landen niht schoeners mohte sîn,  
Kriemhilt geheizen: si wart ein scœne wîp. (2, 1-3)

むかしブルゴントの国に、いともあてなる姫が生まれた。  
世界中で彼女より美しい姫はいないほどで、名をクリエムヒルトと  
いい、やがて美しい婦人に育った。

Der minneclîchen meide triuten wol gezam.  
ir muoten küene recken, nieman was ir gram.  
âne mâzen schœne sô was ir edel lîp.  
der juncvrouwen tugende zierten ándériu wîp. (3, 1-4)

このあでやかな姫が世の人の愛を集めるのに不思議はなく、武士たちはみな彼女に心をよせ、誰しも姫をば憎からず思った。  
彼女の気高い姿はその美しさ限りなく、この乙女の心ばえはまた他の婦人たちの飾りともなった。

édel 高貴な, schœne, scœne 美しい, minneclîch あでやかな, 愛すべきといった形容詞や, tugende 徳といった言葉は、宮廷社会で美德とされる属性を表わすものである。さらにこれに続いて、彼女を守る三人の王や、彼らに仕える臣下たちの名が挙げられ、ウォルムスの宮廷の繁栄ぶりが述べられて、クリエムヒルトの高貴な女性のイメージが強められる。

ジーフリトについても、彼が高貴な生まれであることを語るところから紹介が始まる。

Dô wuohs in Niderlanden eins edelen küneges kint,  
des vater der hiez Sigemunt, sîn muoter Sigelint,  
in einer rîchen bürge wîten wol bekant,  
nidene bî dem Rîne: diu was ze Sântén genant. (20, 1-4)

さて、ニーデルラントの国に気高い一人の王子が生まれた。  
父の名はジゲムント、また母はジゲリントと呼ばれた。  
それはライン河の下流地方で、広くその名がきこえている  
ザンテンという立派な城下町でのことである。

Sîvrit was geheizen der snelle degen guot.  
er versúochte vil der rîche durch ellenthaften muot.  
durch sînes líbes sterke er reit in manegiu lant. (21, 1-3)

この雄々しい颯爽たる王子はジーフリトと名付けられた。  
彼はその雄心にかられて、あまたの国に征旅をこころみ、体力の続  
くまに、多くの国土へ馬をすすめた。

In sînen besten zîten, bî sînen jungen tagen  
man mohte michel wunder von Sîvride sagen,  
was êren an im wüehse und wie scône was sîn lîp. (22, 1-3)

彼の盛りの年ごろ、彼の若かった日に、どれほど彼が栄光を担い、  
どれほど凛々しい若武者ぶりであったか。  
このジーフリトについては幾多のいみじき物語が伝えられている。

ここでもクリエムヒルトの描写に用いられたのと同じような語彙が見られるが、さらに戦士に求められる素質として、snell 勇敢な、ellenthaft 雄々しい、sînes líbes sterke 体の頑強さといった描写が加わり、冒険の旅において êre 栄光、名誉を得たと言うことで、騎士の模範的な姿を表わしているといえる。これらの描写に続いて、成長したジーフリトの刀礼の儀とその祝宴の様子が華々しくうたわれており、これによってさらに彼が異教的英雄ではなく「騎士」なのだということが強く印象づけられる。

こうして描かれる模範的な騎士ジーフリトが、クリエムヒルトの保護者であるグンテルからザクセン戦争やイースラントへの旅といった試練を与えられ、それを乗り越えた後に模範的な姫君であるクリエムヒルトと結ばれる。彼がクリエムヒルトをとめないニーデルラントに帰還して、父から王位を譲られ、父王の庇護の下にあった「王子」から自分自身が全てを決定する権限を持つ「王」になったということは、冒険の旅によって人間的に成長した騎士が、婦人の愛を獲得したことによって一個の人間として完成されたということを示している。

このように、ジーフリトとクリエムヒルトを中心に物語の筋を追っていった場合、第十一歌章まではグレチアンやハルトマンの作品に描かれるような騎士の人間的完成の物語として読むことも可能である。こうして理想的なあり方として描かれた夫婦の関係であるがゆえに、それには賞賛し守るだけの価値があり、それを壊された場合には復讐するだけの価値があるということになるのではないだろうか。

### 3) 登場人物 (2) ——ハゲネ

ハゲネとホグニの決定的な違いは、シグルズ＝ジーフリトの暗殺における役割にある。ジーフリトの暗殺に際して、ハゲネは積極的に計画を立て、それを遂行しようとする。ブリュンヒルトが公衆の面前でクリエムヒルトに侮辱された後、ブルゴントの勇士たちはジーフリトの命を取ろうと相談するが、ギーゼルヘルがそれを諫め、グンテルも乗り気ではなかったために、一度はその計画は流れる。しかしハゲネだけはジーフリトの領土や財宝のことをちらつかせてグンテルの欲を煽り、実際の計画を話して暗殺を承諾させる。シグルズの暗殺では逆に、ブリュンヒルトからシグルズを殺すようにと迫られたグナルがホグニに相談を持ちかけ、シグルズを殺せば彼の所有する黄金も権力も思いのままになると唆すが、ホグニはそれを思い止まらせようとする。さらに、ハゲネはクリエムヒルトからジーフリトの弱点を探り出して自らそこを槍で貫くのだが、シグルズ暗殺の実行犯は、兄たちにけしかけられたグットルムである。グットルムはシグルズが床で休んでいるところを剣で刺し貫いたが、その傷で目を覚ましたシグルズが投げた剣によって真っ二つにされてしまう。それに対してハゲネは周到にジーフリトから武器を遠ざけておき、ジーフリトに直接手を下しながらも生き残る。この結果ハゲネは暗殺実行犯としてクリエムヒルトの憎しみを一身に受けることになる。

### 特異な容貌

ハゲネに関する描写で目を引くのは、彼の外見の特徴が詳しく述べられているという点である。具体的な容貌が聞く者の内に恐怖や警戒心を引き起こす外見的特徴をもって語られ、それによって一種の人物像が外側から形成される。

イースラント訪問の場面と、エッツェルの城に到着した場面で、ハゲネの容貌についてはそれぞれ次のように述べられている。

Der dritte der gesellen der ist sô gremflich,  
(unt doch mit schoenem lîbe, kûneginne rîch)  
von swinden sînen blicken, der er sô vil getuot.  
er ist sînen sinnen, ich wæne, grîmmé gemuot. (413, 1-4)

一行の第三の男は、しばしば荒々しい眼つきをするので、いかにも怒りっぽく見えますが、しかし逞しい体格をいたしております、女王様。

どうもあの男は、心柄の険しい人間かと愚考いたします。

Der helt was wol gewahsen, dâz ist âlwâr,  
grôz was er zen brusten, gemischet was sîn hâr  
mit einer grîsen varwe. diu béin wâren im lanc  
und eisfîch sîn gesihene. er hete hêrlîchen ganc. (1734, 1-4)

この勇士は、真実のところ堂々たる体軀であって、胸幅はひろく、その頭髪は灰色をまじえており、両脚は長く伸び、眼光は爛々と光を放っていた。

彼はまた歩きざまも厳めしかった。

このように、荒々しい目付き、氷のように冷たく恐ろしげな眼差しといった外見的特徴が描写され、恐ろしげな容貌を強調されるのはハゲネのみである。ジーフリトはもちろんのこと、彼が仕える三人の王や、その他の勇士たち、兄弟であるダンクワルトとさえも「目に見える形で」差別化がなされている。彼は他の全てと、つまり宮廷そのものと対置され、宮廷社会の理想を体現するジーフリトとクリエムヒルトの対極にいる存在として描かれているのである。

『ニーベルンゲンの歌』の詩人はおそらくこれを意図的に行なっている。「ヴォルスンガ・サガ」に登場する英雄たちと比べてみたとしても、ハゲネの人物像は単に「異教的」であることさえも超えているように思われるのである。

ホグニは確かに、「すべての者が、こんな男は見たことがないという点で一致」するほどの武勇を見せ、心臓をえぐり出されても苦痛に耐えながら笑うように、人間離れた豪胆な人物ではあったが、グューキ王の息子として生まれた彼は、他の兄弟たちと一緒に「子供たちは、他の王の子たちにくらべ、すべての能力、美貌、身の丈ですぐれていた」といわれる。そしてまた彼はただ猛々しいばかりの男ではなく、人間らしい面も持ち合わせている。彼にはたいへん美しい妻コストベラがいる。アトリの国に旅立つ場面で、「ではご機嫌麗しく、いってらっしゃいませ」とコストベラが声をかけたのに答えて、ホグニが「ご機嫌よう。我々の身に何が起ころうと」と別れを告げると、情のこもったやりとりが描写される。

さらに、ホグニには少なくとも三人の息子の名が認められる。そのうち二人（ソーラルとスネーヴァル）はアトリの国への旅に同行し、戦いの中で命を落とす。もう一人のニヴルンクは、最初は同道しなかったのだが、ホグニとグンナルが殺された後にグズルーンの前に現れ、二人してアトリ王を刺し殺し、父をはじめとした一族の仇を首尾よく討つ。

それに比べてハゲネはどうか。1520-1522 詩節にかけて、ブルゴント勢が旅に出る場面では、別れを惜しむ人々の姿が描かれるが、もしその場に彼の息子なり妻なりがいたとすれば、こうしたやりとりが描かれたとしてもおかしくはないだろう。しかし、詩人はそれをはっきりとは語らないばかりか、むしろあえてそのことに触れないようにしているように思われる。実際に家族はその場にいたがわざわざ書かなかったのか、それともトロネゲの居城に留まっているのか、あるいはそもそもハゲネは独身者だったのか、そうした説明は一切ないが、しかし語られた範囲で感じられるのは、ハゲネの身边からは妻や子といった人々の描写が削ぎ落とされている、ということである。

息子たちの分はダンクワルトの活躍で埋め合わせられるかも知れないが、妻や彼の身を案じる女性の姿はさっぱり見られない。それどころか、彼は女性の側から恐れられ、拒絶される場面さえ見られる。

ブルゴントの一行がエッツェルの国への途上でベッヒェラーレンのリュエデゲールの元に立ちよった際、出迎えた夫人たちは懇ろに挨拶したが、年若いリュエデゲールの息女は次のような反応を示している。

ir vater hiez in küssen; dô blihte si in an.  
er dûhte si sô vorhtlîch, daz siz vil gerne hete lân. (1665, 3-4)

父は彼（ハゲネ）にも接吻せよといった。彼女は彼の顔を見たが、接吻などはやめておきたいほど怖い男に思われた。

Doch muoste si daz leisten, daz ir der wirt gebôt.  
gemischt wart ir varwe, bléich únde rôt. (1666, 1-2)

けれども主人役の父の命令には従わざるを得なかった。  
彼女の顔色は蒼くなったり赤くなったりした。

彼女はブルゴントの三人の王やダンクワルト、フォルケールにもくちづけして挨拶したが、その時にはこのように嫌がる様子を見せていない。ここでもまた、険しい目付きをしたハゲネの恐ろしげな外見が影響を及ぼしているが、単に他の人物と見た目が異なるという以上に、その外見そのものが若い娘にとっては好ましくない、近寄りたくないと思わせる要素として機能しているのである。

### 女性性の拒否

その一方で、ハゲネの側からも女性あるいは女性的なものを拒否していると思われる箇所がしばしば見られる。

ベッヒエラーレンを去るにあたって、リュエデゲールの奥方ゴテリントがハゲネに引出物を贈ろうとするが、ハゲネはそれを辞退して代わりに壁に掛かっていた楯を所望するという場面がある（1697-8）。ゴテリントが贈ろうとしたものは心の籠もった贈り物 *ir minneclîchen gâbe* としか言われていないが、その後で彼女がフォルケールに12個の腕輪を贈ったり、息女がダンクワルトに立派な衣装を贈ったりしていることから察するに、やはり衣類や装飾品の類だったとみてよいだろう。それらを拒んで武具である楯を選んだということは、これから赴くフン族の国での戦いを予期してのことであろうが、同時にそこからは洗練された衣装で着飾る宮廷人たちに対し、あくまでも武士たろうとする姿勢がうかがわれる。

ハゲネのこのような傾向が最も端的に現れるのは、やはりクリエムヒルトとの対立においてであろう。ことに彼女がジーフリートの妻すなわちニーデルラント王妃となり、ブルゴント王家に属する人間ではなくなってからが顕著

である。

クリエムヒルトがジーフリトと結婚してニーデルラントに向かう際、味方の武士を率いていくことになるのだが、ゲールノートの「おん身の好きなものを選ぶと良い」との勧めに彼女がハゲネとオルトウィーンを選ぼうとすると、ハゲネは「怫然色をなし do gewân dar umbe Hagene ein zornlîchez leben (698,3)」断固拒否する。その理由は、「グンテル様は私どもをこの世の誰にもお譲りにはなれませぬ jane mac uns Gunther ze werlde nîemén gegeben. (698,4)」と言っているように、ブルゴント王家への強い忠誠心とグンテル王の一の家来である自信と誇りによるのであるが、一方でクリエムヒルトについて行きたがっている者も大勢いることから考えれば、彼の拒絶はあまりに極端な態度であると言わざるを得ない。

またクリエムヒルトからジーフリトの弱点を探り出そうとする時にも、ハゲネはクリエムヒルトの信頼をあっさりと裏切っている。クリエムヒルトはハゲネに「親愛なハゲネ殿 Vil lieber vriut Hagene (893, 1)」と呼びかけ、彼がジーフリトを守ってくれることを期待して秘密を打ち明けたのだが、ハゲネはそれを裏切ったばかりか、ジーフリトの急所の位置を示す十字を彼女自身に縫い取らせている。その結果彼女は、まったくの誠実な気持ちから行なった行為によって、夫の殺害に協力してしまう事になる。これはクリエムヒルトとジーフリトを裏切ったという以上に、善意や愛といったものに対する裏切りであるとも言えるだろう。

こうしてハゲネの回りからはあらゆるたおやかなものが姿を消す。例外は水の乙女たちくらいであろう。一方でこれはハゲネが宮廷的な人物であるというよりも異教的英雄であるために起こりえた邂逅であったが、しかし他方、女の姿をして現れた彼女たちはやはり、一度は彼女たちの側からハゲネを謀り、次いでハゲネの側から怒りを買って決裂してしまう。

結局、彼が生きるのは男性によって構成される世界であり、野蛮な戦の場であり、彼はその基準に従って評価される人物として描かれる。同じ称賛される男性であっても、ジーフリトがアルトゥース・ロマーンの騎士たちのごとく女性との結びつきによって完成された人間であるのに対し、ハゲネは女性性を徹底的に排除した男性性を体現している。そしてそれゆえ完全に不完全な存在である彼は、クリエムヒルト、すなわちこの物語の女性の代表をも拒絶し、どこまでも相容れることなく破滅へと突き進んでいくのである。

## 結

以上見てきたことから、『ニーベルンゲンの歌』における伝説の変容の特

色は、次のような点にあるといえる。

1. ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説の二つが統合し、単にニーベルンゲン財宝を仲立ちとして時間的に連続するだけのものではなく、緊密な因果関係を持つものとして結びついた。その際、ジーフリートの死に対するクリエムヒルトの復讐を主軸に据えたことによって、復讐の対象が本来のフン族からブルグント族（特にハゲネ）に移行した。
2. 舞台がゲルマン民族大移動期の異教的世界から、同時代の宮廷的・キリスト教的な世界に置き換えられ、古い物語が新たに騎士叙事詩として生まれ変わった。このため、ジーフリートとクリエムヒルトは宮廷物語の中の理想的な人物として描かれることとなり、彼らの間の愛が重要視され、それをハゲネによって打ち壊されたことが復讐の理由となった。

ことに興味を引くのは、復讐の対象という点である。『ニーベルンゲンの歌』では、宗教観や宮廷ロマーンの影響により消すことが許されなくなった、夫を殺したものに対する憎しみをぶつける相手を、意図的に作り上げようとしている。そこに駆り出されたのがハゲネである。彼は『ニーベルンゲンの歌』では伝説とは異なり、兄弟ではなく家臣であるために、恨みを抱く相手としては肉親よりも適している。次に彼は賢いので策謀を巡らして不死身のジーフリートを倒し、自らも生き残ることができる。そうすると彼が悪党であることを示すために、外見的にも険しい目つきが強調される。

ジーフリートが理想的な騎士であり、クリエムヒルトが（少なくとも前半部においては）理想的な貴婦人であるとするならば、このようなキャラクターとして作り込まれたハゲネは正しく全てにとっての敵役である。ジーフリート（宮廷的・キリスト教的騎士）に対しては異教的な英雄であり、クリエムヒルト（女性）に対しては徹底的な男性であり、守るべきブルグントの王たちにとっても、結局のところ彼は死へと導く者である。

『ニーベルンゲンの歌』の「ジーフリート暗殺」が「クリエムヒルトの復讐」という大惨事の引き金となる、という構図があまりにも見事に成功してしまったせいで、以降ニーベルンゲン伝説を素材とした作品では、ハゲネ以外の者がジーフリートを殺すことは不可能になってしまったようである。北欧の作品をもとにしたワグナーの楽劇でさえも、ジークフリートを殺すのはハーゲンである。様々に形を変えつつ語り継がれていく伝説の受容の中で、『ニーベルンゲンの歌』の果たした功績の一つは、「ハゲネは悪党である」というイメージを決定づけたことにあると言えるだろう。



注

使用テキスト

Das Nibelungenlied. Mhd./ Nhd. Nach dem Text von Karl Bartsch und Helmut de Boor ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Stuttgart: Reclam, 1997.

日本語訳

相良守峯訳：ニーベルンゲンの歌（前編・後編）岩波文庫 1955. により，登場人物名や地名の表記もこれにならう。

- 1) 石川栄作：『ニーベルンゲンの歌』－構成と内容，郁文堂，1992年，59 - 90頁。
- 2) 同上書3頁。
- 3) デイヴィッド・デイ（塩崎麻彩子訳）：トールキン指輪物語伝説，原書房，1996年，124頁。
- 4) 同上書123頁。及び，Siegfried GrosseによるテキストのNachwort, S.971.
- 5) 内容・特徴等をまとめるにあたって，次のものを参照する。  
松谷健二訳：エッダ グレティルのサガ 中世文学集Ⅲ，ちくま文庫，1986年。
- 6) ライナー・テツナー（手嶋竹司訳）：ゲルマン神話，青土社，1998年，上巻331頁。
- 7) テキストは，谷口幸男訳：アイスランドサガ，新潮社，1979年。所収の「ヴォルスンガ・サガ」による。
- 8) サガは「伝説的サガ」，「宗教学的問的サガ」，「王のサガ」，「アイスランド人のサガ」に分けられる。伝説的サガは，リアリティーをほとんど問題とせず，文体はロマンティックで誇張が多く，くどくなるため，一般に文学的評価は低い，現存しない古歌謡の内容を伝え，北欧伝説件の比較研究に好個の材料を提供するものとして貴重である。
- 9) 石川栄作：前掲書，232頁，248頁。
- 10) 田中仁彦：ケルト神話と中世騎士物語，中公新書，1995年，190 - 192頁。
- 11) Ursula Schulze: Das Nibelungenlied. Stuttgart: Reclam, 1997. S.142 ff.

その他参考文献

石川栄作：『ニーベルンゲンの歌』を読む，講談社学術文庫，2001年。

谷口幸男訳：エッダ—古代北歐歌謡集，新潮社，2002年，第17刷。

Das Nibelungenlied. nach der Ausg. von Karl Bartsch/ hrsg. von Helmut der Boor. 22. Auflage. Mannheim: Brockhaus, 1988.

John Evert Härd: Das Nibelungenepos: Wertung und Wirkung von der Romantik bis zur Gegenwart. Übersetzt von Christine Palm. Tübingen; Basel: Francke, 1966.

Epische Stoffe des Mittelalters/ hrsg. von Volker Mertens und Ulrich Müller. Stuttgart: Kröner, 1984.

ステブリン＝カメンスキイ著，菅原邦城訳：サガのこころ，平凡社，1990年。

阿部謹也：ヨーロッパを見る視覚，岩波書店，1996年。

阿部謹也：阿部謹也著作集第6巻，西洋中世の男と女 西洋中世の愛と人格，筑摩書房，2000年。

R. ワーグナー作，高橋康也・高橋迪訳：神々の黄昏—ニーベルンゲンの指輪4，新書館，1984年。

集英社世界文学大事典，集英社，1997年。

## Die Verwandlung der Sagenstoffe im *Nibelungenlied*

Sayaka NOUCHI

Das *Nibelungenlied* entstand um 1200 auf der Grundlage der alten germanischen mündlich überlieferten Heldensagen. In dieser Abhandlung hat die Verfasserin das Augenmerk darauf gerichtet, dass der namentlich nicht bekannte Dichter des *Nibelungenliedes* nicht nur die Sage überliefert, sondern auch verschiedene Aspekte des Geschehens im Verlauf seines Schaffensprozesses mit Absicht verändert und damit ein neues Werk schafft. So wurden in dieser Abhandlung Überlegungen darüber angestellt, wie der Nibelungen-Stoff von dem Dichter verändert wurde, und vor allem ein Vergleich mit der *Völsungasaga* durchgeführt, die auch dem Nibelungen-Stoff entstammt.

Das *Nibelungenlied* besteht aus zwei Teilen; der erste Teil (1.-19. Aventure) beruht laut Andreas Heusler auf der *Brünhildsage* und der zweite (20.-39. Aventure) auf der *Burgundensage*. Die letztere basiert auf historischen Tatsachen: Der Hunnenkönig Attila starb in der Brautnacht mit einem germanischen Mädchen namens Hildiko, und man interpretierte, dass sie ihn tötete, um die Burgunden zu rächen, die schon von den Hunnen in den Untergang geführt worden waren. Die frühere Gestaltung der Burgundensage lässt sich der *Edda* entnehmen: der Hunnenkönig lädt die burgundischen Könige ein und tötet sie, weil er ihren Hort besitzen möchte, und dann nimmt ihre Schwester Rache dafür.

Dieser Geldhort gilt als derselbe, den Siegfried einmal besessen hat, so dass die Brünhildsage und die Burgundensage zueinander in Beziehung treten. Der Dichter des *Nibelungenliedes* verbindet beide Handlungen, die mit dem Hort als thematische Vermittlung bloß zeitlich aufeinanderfolgen, zu einer eng zusammenhängenden Geschichte. Er stellt die Rache von Kriemhild in den Mittelpunkt. Die Ermordung Siegfrieds durch Hagen bildet das Motiv ihrer Rache, und Burgunden- bzw. Hunnenuntergang stellt im *Nibelungenlied* die Konsequenz aus diesen Handlungszusammenhängen dar. Im *Nibelungenlied* spielt Hagen eine sehr wichtige Rolle, da er mit seinen eigenen Händen Siegfried tötet, den von Siegfried auf

Kriemhild vererbten Nibelungenschatz raubt und dafür von ihr gehasst wird und sie Rache an Hagen übt.

Die *Völsungasaga* ist in Bezug auf die Handlung der *Edda* ähnlicher als das *Nibelungenlied*. Aber die Nibelungensage lässt sich auf einer den Nordländern angepassten Weise entwickeln, indem z.B. die Reise der Burgunden nach Hunnenland als eine Schifffahrt beschrieben ist, als ob es sich bei den Burgunden um die Wikinger handeln würde. Darin zeigt sich die Wandelbarkeit des Nibelungen-Stoffes. Es gilt deshalb, den Vergleich zwischen der *Völsungasaga* und dem *Nibelungenlied* anzustellen, um darzustellen, wie sich das auf den veränderlichen Sagenstoff auswirkt, und auf welcher Anschauung bzw. Interpretation der Dichter das Epos gestaltet.

Während in der *Völsungasaga* die Geschichte beim mythischen Zeitalter der Vorfahren Sigurds (= Siegfrieds) ihren Ursprung nimmt und bis in die späteren Jahre von Gudrun (= Kriemhild) sowie ihren Kindern nach dem Burgunden- und Hunnenuntergang fortgesetzt wird, handelt es sich im *Nibelungenlied* um nur eine Generation: Siegfried und Kriemhild. Die Handlungsstruktur zeigt klar, dass Siegfried durch Hagen getötet wurde und Kriemhild dafür Rache an Hagen nimmt.

Sigurd ist der Nachkomme des germanischen Gottes, aber Siegfried erscheint als edler Prinz und vorbildlicher Ritter, und auch Kriemhild ist als Idealbild einer Dame in der höfischen Welt dargestellt. Wie Siegfried von Gunther durch den Kampf gegen die Sachsen und die Reise nach Island geprüft wird und sich danach mit Kriemhild verbindet und dann heimkehrt und König der Niederlande wird, kann als eine Geschichte gelesen werden, die vom Heranreifen bis zur Vollendung der Persönlichkeit eines Ritters erzählt, wie die Arthusromane von Hartmann von Aue bzw. deren Vorbilder von Chrétien de Troyes. Siegfried und Kriemhild stehen für die idealisierte Gattenliebe, und dabei wird die Zerstörung dieser Beziehung durch Hagen als eine sehr schwere Schuld angesehen, so dass unvermeidlicherweise von der treuen Witwe die leidenschaftliche Rache verübt werden muss.

Deshalb ist Hagen als der Feind Siegfrieds und Kriemhilds als eine ganz außergewöhnliche Gestalt dargestellt. Er unterscheidet sich von allen anderen durch sein Furcht einflößendes Aussehen und zeigt sich dadurch nicht als der Ritter am christlichen Hof, sondern als wilder heidnischer Held. Während in der *Völsungasaga* über die Frau und die Söhne Högnis (= Hagens) erzählt wird, fehlen diese Figuren im *Nibelungenlied*. Wenn im *Nibelungenlied* die Frau Rüdigers Hagen ein Geschenk macht, lehnt Hagen es ab und möchte statt dessen den Schild bekommen. Aus diesen Beschreibungen entsteht nach Einschätzung der Verfasserin der Eindruck,

dass Hagen ausschließlich durch etwas Männliches und Gewalttätiges charakterisiert wird und dass etwas Frauenhaftes und Mildes ( z.B. die Ehefrau, Familie und Liebe) um ihn herum ganz fehlen. So will er sich mit Kriemhild, Repräsentantin der Damen dieses Epos, nie versöhnen, sondern die Handlung des Untergangs führen.

